
Shangri-La

宮城時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h a n g r i - L a

【Nコード】

N 1 5 0 6 B

【作者名】

宮城時雨

【あらすじ】

フィーロン国で時計屋を営む少年ライナスはある日突然、憧れの騎士団で働くことに。仕事の内容は副団長のアベルの付き人。狂喜するライナスだったが、個性の強い騎士達に振り回されるハメに…

プロローグ（前書き）

Shangri-Laは、私、宮城時雨が某雑誌新人大賞に投稿し、落選した作品です（汗）

駄文ゆえに、見苦しい所も多数あるとは思いますが、思い入れの強い作品なので、この場をお借りして連載させて頂きます！

作品のご感想、アドバイスを頂けたらとっても嬉しいです！

プロローグ

そこは、暗く、冷たい時空の狭間。

彼は、主人がくるのを待っていた。

「お前と私とで、こんな腐った世界を終わりにして、一緒に理想郷をつくろう」

と、彼の主人は言った。

なのに。

彼は、彼のつくり主に、ある日突然封印されてしまった。何がいけなかったのか、彼には分からなかった。教えて欲しかった。

彼のつくり主はこう言った。

「お前をつくったのは間違いだったのかもしれないね。お前の居場所はこの世ではない。お前にふさわしい所へ連れて行ってやろう。」

そして、ここへ来た。

たくさんの時間が交差し、行き交う空間。そこは時が流れているように、まるで流れていなかった。

彼のつくり主はこうも言った。

「お前にふさわしい主人が見付かったなら、この扉は開くだろう。そうしたら、理想郷なりなんなりつくれ」

彼は待っていた。

第1話 クリスとセルシウス

「また辞めてしまいましたね」

カップに紅茶をそそいでいた少女がつぶやいた。美しいブロンドに、澄んだ蒼い大きな瞳を持っている。

「ああ、困ったものだよ」

と、答えた青年は、少女と同じく金色の髪の毛、そして灰色の瞳の持ち主だった。

「どうぞ」

「ありがとう」

少女からカップを受け取ると一口すすり、青年は言った。

「クリス、今日辞めた娘で何人目だ？」

「ええとですね、ぴったり十人目です」

「ほう。ついに二桁に突入したか。このまま三桁まで増えるのも、ある意味面白いかもしれないな」

「セルシウス様！」

クリスが目を吊り上げたのを見て、セルシウスは愉快そうに笑った。

「いや、すまない。冗談だよ。私もアベルのやつが心配だよ」

「最後の言葉に心がこもっていませんでした」

クリスはため息をついた。

「でも、アベル様にも困ったものです。いつまでたっても付き人ができないなんて。色々ご不便もおありでしょうに。私、お手伝いしたいけれど、近付けても下さらなくて」

「まあ、人手が足りないのは困る。クリスだって仕事が増えて大変だろう？」

「ええ、まあ」

「では、いつもの手筈でよろしく頼むよ」

かなりやる気のない声だ。

クリスはしらけた目で自分の主人を見た。周りからの評判は、非の打ち所がないほど良いのだが、実際は適当で何を考えているのかさっぱり分からない騎士である。

「と、いいますと？」

「城下にアベルの付き人を募集しているという内容のチラシを配ってだな…」

その案にクリスは力なく首を横に振った。

「その方法で人材を探すのは、難しいかと思います」

「なぜだい？」

「もう、そのような目立つ方法だと、アベル様が死にもの狂いで阻止してきますから」

クリスの言葉に合点がいったというようにセルシウスが頷く。

「なるほど。まあ、そうすると…アベルには極秘で物事を進めなくてはいけないね。さて、どうしようかなー」

「ええ、どうしましょう？」

しばらく二人は沈黙した。かたやこの問題の解決策を見つけるために、かたや主人の答えを待ったために。

「よし、こうしよう」

沈黙を破ったのはセルシウスである。

「あら、何かいいお考えが？」

セルシウスの付き人歴三年。クリスはセルシウスのことをある程度理解していると自負していた。が、

「クリス、悪いが、使いに行ってきたくれ。書類の整理は明日でいい」

「はい。で、どちらへ？」

「うむ。城下の時計屋へ行ってきてくれないか？」

「えっ？」

ポカンと付き人の少女は主人の顔を見つめた。

やはり、何を考えているのか分からない。

第1話 クリスとセルシウス（後書き）

やっ和本編ですゝ

主人公出てきてないけど（笑）

第2話 ライナス

「よし」

夕方。彼以外誰もいない店の中で、少年は独りごとを言った。
手に持っていた銀の懐中時計を、それに見合うサイズの箱に入れる。

「ライナス、終わったの？」

「はい。今終わりました」

ライナスと呼ばれた女顔の少年は、浅翠の瞳を細めて自分が修理した時計を見つめた。

「ねえ、母さん。この時計、セルシウス様の物なんだよ」

「ええ、五回聞いたわ」

「うちの店ってそんなに評判いいのかなあ？ 騎士の方から依頼がくるなんて」

「それは、お城の近くにある時計屋はうちだけだもの。評判は関係ないんじゃないかしら」

「そっか…じゃあ、今日、この懐中時計を引き渡す予定なんだけど…セルシウス様本人が来たりしないよね？」

その言葉にライナスの母親であるアンヌは首を横に振った。

「このところ戦はないとはいえ、仮にも騎士団長さんなのよ。忙しいに決まってるじゃないの。」

「うん…」

そう言うてはみたものの、ライナスの心の中には、希望と期待の感情がまだ残っていた。

彼、ライナスは決してミーハーな性格ではなかった。

どちらかといえば大人しい性分で、あまり外には出たがらない。なので、こうして親の手伝いをしていた。

ライナスの住んでいる国、フィーロンには、国の領土、民、そして王を護りための騎士団がある。

団長は王が決めることになっている。任命された騎士は団長として騎士団を束ねていくのだが、大きな手柄を立てると、家柄関係なく王の側近に出世できる。

セルシウスの先代の団長であるイヴンは三年前、敵国であるツアラードとの戦いで命を落とした。

そして、王は新たな団長としてセルシウスを任命した。当日二十七歳の若者が選ばれたのは異例だったが、セルシウスは剣術の天才としてその名を轟かせていたため、それに異論を唱える者はいなかった。

その後、ツアラードとの戦いで奇跡的に生き残った当時の副団長のウェストンは、戦での功績により現在王の側近として活躍している。

「そういえば、この時計は誰がここへ持ってきたの？」

この話題に先程まで失望の表情を浮かべていたライナスの顔がパツと明るくなった。

幼い頃から彼の騎士に対する憧れは、人一倍強かったのだ。

なので、このような話題になるとライナスは途端に能弁になる。「クリスさんっていうセルシウス様の付き人の方だよ。僕と同じ年頃の女の子だった。少しお話したんだけど、とっても感じの良い人だったよ」

「クリスさんが羨ましいの？」

「それは、まあ。でも、僕は今のままで幸せだよ。だって大好きな時計に携わって仕事ができるんだもの」

ライナスは微笑んだ。

「あなたのような後継ぎがいれば、我が家は安泰ね」

母子が声をそろえて笑う中、店のドアに付いているベルが客が来たことを知らせた。

第3話 来客

「こんにちは」

ライナスは声の主を見た。セルシウスの付き人の少女だ。

「いらっしやいませ。修理は終わってますよ。ね、ライナス」

「あ、はい。こちらです」

すっと、箱に入った銀の時計をクリスに差し出す。

「ありがとうございます。セルシウス様が訓練の時に落としたとかで。動かなくなっただけで困ってらしたの」

実のところ、時計屋へ行く口実が欲しくてわざと落として壊したのだがこの場でそんなことは言えない。

「この時計はライナスさんが直したの？　すごいわ」

「いやあ。これしか取り柄がなくて」

ライナスはこれといって抜きん出た特技はなかったものの、昔から手先はかなり器用だった。なので、家業である時計屋の仕事をあつというまに習得し、今では店の仕事のほとんどをライナスが片付けている。

「あの…ところでライナスさん。つかぬことをお尋ねしますが…」

先程までの笑みはどこへやら、突然クリスは視線を泳がせ、うつむ

いた。

「ん？」

「その…騎士団のお仕事に興味、おあり？」

しどろもどろな調子で、クリスがライナスに尋ねた。

かなり不審な態度である。だが、話題が話題だけにライナスはクリスの態度を不審に思う感情など忘れてしまっていた。

ライナスは何かに夢中になると他のことに目がいなくなるのだ。

「うん！騎士様は国民の憧れだもんな！悪い噂なんて聞かないし。僕も騎士団に入団したいって思うけど…体力に自信ないし」

悪い噂は聞かない。

この言葉にクリスはピクリと反応した。

「あ、あの…それでは…副団長のアベル様はご存じ？」

「もちろんだよ。たしか三年前に即位された方だよ。でも、いまだに見たことがないんだよ。城下町には来ないみたいだし」

騎士団員ならば城下の見回りに来るのだが、団長や副団長ともなれば、そんな雑用など部下にまかせるのが普通だ。

当然ライナスもそのこと知っている。なので城下でアベルを見たことがなくても、彼は別に不思議がらなかった。

ただ、団長であるセルシウスことは、見かけることがある。

この前は近所の人々と世間話をしているのを店の窓から見かけた。

なんでも、セルシウスはかなり社交的な性格で、城下の人間から親しまれている、という話をアンヌから聞いた。

アンヌも以前、一度だけセルシウスに道を尋ねられたことがあるらしい。

ライナスの頭では騎士Ⅱ完璧な人という図式ができあがっている。

民を護るために剣を振るい主人である王に尽す姿はカッコいい。

それに、ライナスが騎士に憧れているのには、もうひとつ理由があった。

第4話　ファイロンとツアラード

ファイロンにはある一つの伝説がある。

今から五百年前、世界最大の領土と武力を誇るツアラードがファイロンを植民地とし、制圧していた時代があった。

ツアラードは武力で世界中の国々をを自国の支配下におこうと画策していたのだ。

昔のファイロンには現在のような騎士団などなく、非力な兵力だったので、当然抵抗することなどできるはずもなく、国民はもちろんのこと、王族までもが奴隷にされてしまった。

皆、ツアラードの暴挙に苦しんだ。

そんなある日の夜。

当時のファイロン国王であるウォーラーの前に一人の少年が現れた。

少年はウォーラーに自分はファイロンの守り神であることを告げ、ウォーラーに一匹の龍を与え、消えた。

その日、晴れてファイロンはツアラードから解放された。

龍が敵軍および王族を全滅させたからである。

そして、ウォーラーは自由と大いなる力を手に入れ、代わりに善

良な心を失った。　龍を使って世界を手に入れようとしたのだ。

逆らう国は龍の炎で焼かれ、恐れをなして服従した国は植民地にされた。

月日は流れ、再びフィーロンの守り神である少年がウォーラーの前に姿を現し、今度は龍を奪った。

少年は龍を時の狭間に封印し、その空間の扉の鍵をウォーラーに渡し、言った。

「あなたのしたことは許します。その代わりにこの扉と鍵を守りなさい」

こうして、ウォーラーは自分の行いを悔いて、その言葉に従い、扉を隠すために大きな城を建てた。それが現在の騎士団の本拠地である。

そして、今も龍を封印している扉と鍵は城に存在しているといわれている。

そういうわけで、女顔で大人しそうな外見に反して、好奇心旺盛なライナスはその扉と鍵を見たくて仕方ないのである。

第5話 夢に向かって

夢のような考えがライナスの頭の中をグルグル回っていたが、クリスの声で現実に取り戻された。

「念のため：お尋ねしますが：アベル様について、何かこう：変な噂を聞いたことはありませんか？」

ライナスは迷うことなく首を横に振った。

「そうですか！ 良かったー」

そういうとクリスはズいっと身を乗り出した。

「ライナスさん、転職する気はありませんか？」

「て、転職？」

時計屋の仕事を不満に思ったことはない。むしろ、この仕事が自分の天職だとライナスは思っていた。両親の跡を継ぐことを目標に働いてきたのだから今更他の仕事などする気にならない。「うーん、僕、時計屋の仕事が気に入ってますから。転職というのは、考えたことないなあ：あつ！ でも騎士団に入れるなら転職してもいいかも」

ライナスは冗談混じりに言っただつもりだった。だが、クリスにはそうはとってもらえなかったらしい。

「本当ですか！ よかったあ。ライナスさんならきっとそう言った

くれると思ってました！ セルシウス様の言った通りだわ。ただの変人騎士かと思っていただけ、さすがに人を見る目は確かなのね！」

クリスは一人で盛り上がっている。ライナスは先ほどの彼女の発言を頭の中でリピートしていた。

……変人騎士？

「ライナスさんっ！」

「は、はい？」

「ありがとう！ あなたには本当に感謝するわ。騎士団で働いてくださるのですよね？」

「ええと…」

クリスの心から嬉しそうな様子を見ると

「さっきのは冗談です」

なんてことはライナスには言えたものではなかった。

そこが彼の弱い所である。

昔から人からものを頼まれるとなかなか断ることができない。

「願ってもないお話しじゃないの！ やったわね！ ライ！」

アンヌだった。かなり乗り気なようである。

「でも、母さん。店は？ 僕がいなくても大丈夫？」

「全然平気よ。だいたい今まであんたが全部片付けちゃうから、私もお父さんも暇だったのよ。だからお店のことは心配しなくていいから！ ライは騎士団で働きなさい！」

「でも、僕に務まるかな…」

「それなら大丈夫ですよ！ 私が責任をもってお教えますから」

ライナスはアンヌとクリスの顔を交互に眺めた。

二人ともなぜか必死の形相をしている。

第5話 夢に向かって（後書き）

中途半端…（汗）
すみません

第6話 決心

ライナスはしばらく考え込み、そして答えを出した。

「わかりました。本当に僕なんかでいいなら、喜んで」

「ありがとうございます！」

クリスは深く頭を下げた。

「では、面接は明日でよろしいですか？」

（め、面接…？）

ライナスは面食らった。

なにせ人の前で話をするのは大の苦手なのだ。緊張して喋れなくなるのは目に見えている。

やはりこの話は断ろうか…。

駄目なのが分かっているのだから、わざわざ恥をかきに行くことはない。

（いや…きつと僕びこういう所がだめなんだ…きつと）

思えば、この十四年間の人生は嫌なことから逃げてばかりだった。

ライナスはそんな自分が嫌いだった。

自分を変えたい。

「…はい。明日よろしく願います」

ここで逃げたら一生後悔することになるだろう。

「分かりました！ では、明日の午後に向かえにありがとうございます」

クリスは満面の笑みを浮かべた。

「私、そろそろお城に戻りますね。早くこのことをセルシウス様にお伝えしないと。それでは、また明日。ライナスさん」

「あ、はい」

クリスが時計の入った箱を手にとると、軽く会釈をし、店から出て行った。

その後ろ姿を見送り、ライナスは椅子にもたれかかった。

「ほら！ 何してるの、明日の準備しなくちゃだめでしょ」

「え？ 準備ってなにをするの」

ライナスは、今日一日色々ありすぎて疲れていたのだが、アンヌは妙に気合の入った様子でライナスを立たせた。

第6話 決心（後書き）

お久です！
連載開始しました。読んでくださってありがとうございます

第七話 親子

「何って…決まってるじゃないの。明日の面接の練習よ。あんたは口下手なんだから。きちんと準備しないとね」

「あ…なるほど」

「なるほどじゃないわよ。その様子だつとぶっつけ本番で行くつもりだったでしょ」

「はは…うん。まあ」

ライナスは居心地悪そうに眼を泳がせた。

「まったく…ライここに座りなさい」

ビシッとテーブルのそば椅子を指指す。逆らうと何を言われるかわからないのでライナスは従うしかなかった。

この家に主導権は母であるアンヌが握っているのだ。

「よしっ。それじゃはじめるわよ」

ライナスは黙って母を見つめた。

なぜこんなにテンションが高いのか…。

「何よ、そんな冷めた目で見たりして。気合を入れなさい」

「…………おー」

ライナスは力なく拳を作って手をうえに上げた。

それをみてアンヌは満足そうに微笑む。

「いい？ライ。明日は精一杯自分をアピールするのよ」

「えーと、母さん」

「何？」

「クリスさんがいた時もそうだったけど、どうしてもそんなに必死なの？」

「そんなの決まっているじゃない。ライがどうしても騎士団で働きたいっていうから親としてどうしてもかなえてあげたいのよ。さつきだってあんたがクリスさんのお話を断ってしまうんじゃないかってヒヤヒヤしたんだから」

ライナスは先ほどの母の必死の表情を思い出し、苦笑した。

「心配してくれてありがとう。でも僕だって自分のことくらい自分で決められるし、大丈夫だよ」

「そう？　ならいいんだねど」

「あつても面接の練習は付き合っただね。これは一人じゃできないから」

このときにはライナスも気合十分だった。

明日は絶対に受かって、心配性の母を安心させてやらねば。

「そうと決まれば徹底的にやるわよ」

「うん！」

こうして親子のレッスンは夜中まで続いた。

第七話 親子（後書き）

稚拙な文章ですみません…

第8話 アベル

「おめでとう！」

上司にいきなり肩をたたかれ、アベルは一瞬面食らった。

「団長…」

「おめでとう！ 君にぴったりの付き人が見つかったよ」

「またその話ですか」

そっけない返事を返すと、アベルは書類に目を通し始めた。

「おや。今日はずいぶん冷たいんだね。いつもなら堅苦しい挨拶をしてくれるのに」

「……すみません」

アベルの本当に申し訳なさそうな声にセルシウスは苦笑した。

「いや。いいよ。話題が話題だからね。で、話を戻すけど…」

そこでセルシウスが言葉を切ると、アベルはため息をついた。

どうやらこの上司は無理やりにも自分に話を聞かせるつもりらしい。

「実は今日、クリスを城下の時計屋に行かせてね。そこの息子さん

が明日面接を受けに来ることになった」

「お、男…？」

アベルは絶句した。男の付き人など聞いたことがない。

「そうだよ。君があまりにも女性嫌いが過ぎるから、こういう手段をとった」

「…別に嫌いなわけではありません」

「はぁ？」

「怖いんです」

うつむきながらアベルがつぶやいた。

彼は極度の女性恐怖症だった。

副団長に任命されて三年。決まりごととして、団長と副団長には付き人がつくことになっている。だが、アベルの付き人になった女性たちは、早くて二週間、もって半年で辞めていつてしまった。

言うまでもなく原因はアベルの付き人へと態度にあった。ある者は怒り、ある者は泣いて城を出て行ってしまった。

正直な話、アベルは付き人が出て行く度に内心ほっとしていた。それほど異性が苦手だった。それに彼は付き人など必要だと思ったことがない。自分の仕事くらい自分で片付けられる。しかし、どんなにアベルがそういつて主張してもセルシウスは聞き入れなかった。

それどころか次から次へと気に入った女を連れてくる。

「団長…」

「うん？　なんだね」

「その少年は本当に俺の付き人になることを承諾したんですか？」

男の付き人など前代未満である。女の仕事を男がするなど想像できない。

「うーん。いや、実はうちで働かないかっていうお誘いだけで…。でも、大丈夫。明日必ず仕事の内容を話すよ」

アベルが腕を組んでなにやら考え込んだ。

「…団長…」

「んー？」

「ずいぶん…楽しそうですね…」

「ああ！　まあね。ずいぶん君には振り回されてきたからね！」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべるセルシウスにアベルはため息をついた。

きつと、とんでもないことを考えているに違いない。しかし、彼を止めることのできる人間は誰もいない。

「そういうわけだから、明日を楽しみにしていてくれたまえ！」

そういつて豪快に笑い部屋を出て行く上司の背中を見送り、アベルはまた、ため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1506b/>

Shangri-La

2010年10月10日15時12分発行